慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戸田慎太郎著 日本資本主義と日本農業の発展
Sub Title	
Author	島崎, 隆夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1948
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.41, No.1/2 (1948. 2) ,p.98- 106
JaLC DOI	10.14991/001.19480201-0098
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19480201-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戸田愼太郎氏著

「日本資本主義と日本農業の發展」

島崎隆夫

戸田愼太郎氏近業「日本資本主義と日本農業の發展」（二二・一〇　民主評論社版）はかつての資本主義論爭――封建論爭が廣汎なる分野に展開せられた後期に於て、封建論爭の過程の中より生じ「封建論爭の一收穫」として世に問はれた同氏著「日本農業論――日本資本主義に於ける所謂半封建的農業關係把握――」（昭和一一年叢文閣版）の增補改訂版である。本書は舊著に比し個々の問題に關し一層具體的分析を加へ、更に過去の論爭の成果と事實の發展經過を考慮せられつゝ筆を加へられたものであるが、その批判的立場は本質的には舊著をそのまゝ受けつがれてゐる。私は本書の重要なる問題と見解の一二を紹介しつゝ、本書の持つ意義を明らかにし、以て農業問題研究への一つの出發點を見出したいと思ふ。拙文を書きつゝある時、小池基之氏による本書の書評が發表せられた。（三田新聞二二・一一、二〇第五七七號）

一

周知の如く、過去の資本主義論爭――封建論爭は一九二〇年代に於て高潮に達しつゝあつた日本プロレタリヤートの政治的經濟的鬪爭に於ける戰略戰術に關する要請、即ち實踐的意圖の下に提起せられた諸問題の解明を一つの契機として展開された理論鬪爭であつた。即ちそれは日本革命運動の性格と展望の認識、戰略戰術の決定に於て二つの相違る見解を生じ、日本資本主義構造の封建的要素の存在と比重の評價とを中心に展開せられた廣汎なる學問分野にわたる論爭であつた。

一方の立場＝「勞農派」＝は日本資本主義構造に於ける「近代性」を重視し、當面の日本革命の展望に於ては所謂「一段階戰略論」を取つた。この立場より革命の主要任務を「ブルジョア民主革命の廣汎な任務を伴ふ社會主義革命」と規定した。農業問題に於ては、我國農業の特質を封建制約農業と資本制的農業との中間形態の一つ、或はマルクスの言ふ過小農的土地所有制の上に成立する過小農經營の特質の中に求めた。從つて、我國農村に殘存する多くの封建的要素への評價は極めて低く、日本農業革命の當面の課題はもはや封建遺制の廢除＝土地制度の改革に求められなかつた。

他方の立場＝講座派＝は日本社會に於ける「封建性」を極めて重く評價し、そのため日本革命の展望は所謂「二段階戰略論」の下に、「多かれ少なかれ急激に社會主義革命に轉化するブルジョア民主革命」の遂行を主要なる任務であると規定した。農業問題の把握に於て、我國農業の特質を封建的土地所有關係の上に成立する生產關係そのもの特質に求め、寄生地主的土地所有關係の解決を當面の農業革命の中心課題とした。

右の如き基本的には二つの相異つた見解の上に、而も多くのニュアンスを持ちつゝ論爭は展開せられた。かゝる論爭は帝國主義的戰爭遂行と云ふ外部的事情のため一時中止せしめられた。（論爭そのものは他著を參照。註一）

既に戰爭半ばにして早くも我國農業の封建的性格は食糧供給不足と勞働力轉出に伴ふ農村勞働力不足とに深刻な問題を內含しつゝ、帝國主義的戰爭遂行上に於て多くの矛盾を鋭角的に露出してゐた。それは戰爭政策遂行にとつて最大の障碍となつた。從つて日本資本主義の基底をなしてゐた我國農業の封建的性格が異常なる重大さを以て問題となるに至つたのは誠に當然と言はねばならない。敗戰の事實はこれらの矛盾を今や表面化し、我國農業の構造的危機として全面的に現れてきた。それは先づ食糧問題との關聯に於て意識され、食糧問題の解決は根本的に我國農業生產構造そのものゝ矛盾へ鋭い批判のメスを指向せしめた。かくて、當面せる我國ブルジョア民主々義革命の徹底化の基本條件の一つが我國農村の封建性の一掃にあり、その中心的課題が外ならぬ封建的土地制度の改革に指向されつゝあることは周知の通りである。特にこれは昭和二〇・一二・九のマ司令部の「農民解放指令」を强力な拍車として確定せられた一つの方向となつた。第一次及び第二次農地改革法の性格は一部小作地の解放の故に多分の進步性を有しつゝも、根本的には封建的土地所有關係そのものを何等變革してゐない點に於て、又土地に對する農民鬪爭の戰線分裂を導き土地改革を不徹底にし民主々義革命を無力ならしめる要素を含む點に於て、多くの問題點を含むでゐた。それはとにかくとして、土地改革を中心に、農業革命を基軸として展開されてゐる當面のブルジョア民主々義革命の現實的要請として、過去のそれが求めたと同じやうに、多くの問題を中心に新しく資本主義論爭封建論爭が行はれるに至つた。我々は此の論爭をして過去の論爭の單なる再生產に終らせることなく、現實の民主化の過程を强力に推進せしめる力として、過去の論爭の成果を充分批判的に取り入れ、以て新課題に具體的に答へ得るやう論爭は展開せらるべきであると思ふ。

さて、戰後に於ける論爭に於ても、基本的にはなほ未だ二個の見解が大きく對立してゐる。それは過去の論爭の一つの延長とも考へられるが、しかし幾つかの相違點が存在してゐる。其上單に「講座派」と「勞農派」との對立のみでなく、「講座派」特に山田、平野兩氏に對する批判が展開せられつゝある。（註二）論爭の中心點は (1)方法論上・特に蓄積論の問題、(2)國家論―

絶對主義論の問題、(3)農業理論—土地制度改革並に我國農業に於ける資本主義の發展の認識、(4)特權的な獨占資本の問題、等に置かれてゐる。特に問題を農業部面に限れば、土地問題とそれの解決を巡りこの論爭と農業に於ける資本主義の發達の意義と評價とに關する論爭である。かくして講座派理論の批判として展開された重要な一點は日本農業に於ける資本主義の問題に關してであつた。講座派理論の弱點の一つは日本資本主義を封建制のもとで全く固定化し、資本主義的發展の一般的法則の日本に於ける貫徹への輕視或は無視の問題に關聯し、特に我國農業における資本主義的關係の發展を否定し去つた點に關するものであつた。批判の要點としては日本農業構造の封建性と特殊性を一面的に重視又固定化、日本農業に於ける資本主義的發展の否定或は過小評價、農民層分解の無視、「二つの道」として提起されたレーニン的諸理論の無理解、ブルジア民主々義革命から社會主義革命への轉化の現實的階級的基礎と必然性の不認識等々を中心として居る。

然し乍ら、これらに對する反批判も既に起りつゝある。例へば、日本農業に於ける資本主義的發展の闘爭を強調するあまり、日本資本主義の特質に特質づけられ複雜化され深化された諸矛盾を資本一般の矛盾に一元的に解消し、單純化しはしまいかと指摘する論者が現れて來た。又、別の問題として資本主義により直接生産者達の自給自足經濟が破壞せられ商品經濟にとつて代られる過程と、商品經濟から資本制商品生産への轉化の過程相互の關聯に關する考察にも多くの問題點を含むでゐるものと思はれる。(註三)

私は戸田氏近業は右との關聯に於て、右の課題への一つの解明の足場として置かれはしまいかと思ふ。

註一、日本資本主義論爭に關して終戰後多くの回顧的な、總括的な諸論文が發表せられたが、社會經濟勞働研究所編「日本民主革命論爭史」及同所編「日本資本主義論爭史」及著者の立場を異にするが對馬忠行氏著「日本資本主義論爭史編」等が發行せられてゐる。

註二、神山茂夫氏著「天皇制に關する理論的諸問題」「日本資本主義分析の基本問題」及「日本農業に於ける資本主義の發達」の三部作に於て全面的に展開せられてゐる。なほ、豐田四郎氏の諸論文を參照。

註三、井上晴丸氏「日本農業資本主義化の問題」(經濟評論三二年八・九月號)

二

本書に於ける研究の重點の第一は維新後に於ける「農業發展の基礎的條件」即ち土地所有關係=農業關係の性格—一應の進歩的性格と封建的性格—の解明である。(上篇第一章第一節—第三節)明治維新により創り出された近代日本の出發點の一つとしての土地所有關係=農業關係の再評價及再認識の問題である。現代の農業問題のみならず日本資本主義研究の課題としても明治維新の學問上持つ意義は云はゞ絶對的であつて、過去の資本主義論爭—封建論爭の主要なる論爭の主要なる論爭對象の一つが此處に置かれてゐた事は決して不思議ではない。例へば、幕末=維新史論爭(所謂「マニュ論爭」及所謂「新地主」論爭)、明治維新評價に關する論爭、地租改正—土地制度—小作制度に關する論爭等。明治維新の評價の態度如何が最も良くその批判的立場を表現するものとさへ思はれる。著者の批判的立場は序文(五頁)中に示されてゐるが具體的には明治維新評價に於て最も良くうかがわれ、それは又本書全體を一貫する批判的立場でもある。

一方維新革命を以て簡單に「封建制が崩壞した」「單純なるブルジョア革命」と評價する「勞農派」とは對立し、他方維新革命を以て「單なる封建制の再組織」「妥協的解消形態」と見る「講座派」殊に山田=平野氏見解に對しても相違し、著者は「維新革命は、要するに、德川純粹封建制の全國的統一的規模に於ける、上からの絶對主義的な改良的なブルジョア的變革にあつた。」(三頁)(註一)と主張する。その理由として (1)內部的には德川封建制をして革命的ブルジョア的に解體せしめる積極的ブルジョア的要素の發達の畸形化—腐朽內訌—商品流通の發展に伴ふ財政困難—上から絶對君主制的國家への移行の傾向を示してゐたこと。(2)外部的には外國資本の壓迫—從前の支配階級自身のヨリ急激に自らをブルジョア的に適合せしめる必要に迫られてゐたこと。(四—五頁)此の兩面より把握せられた明治維新の政治的成立過程は根本的に相異る二つの階級間の闘爭(封建貴族と新興ブルジョアジー)ではなしに、寧ろ在來の封建支配者相互間に於ける闘爭に、而もブルジョア的方向への自己變革の必要程度の差異による急進的=勤王的な勢力と保守的=佐幕的勢力との闘爭に求められた。(七—九頁)次に明治維新の基本的な經濟的搾取關係そのものを見るに明治維新を上からの絶對主義的改良的ブルジョア的變革と規定する著者は明治維新の搾取關係はブルジョア的發展方向は指示されてゐるが實質的には直ちにブルジョア化したのではなく依然としてその根底には封建的搾取關係が存在してゐたと。即ち維新に於て政權を掌握したものが絶對主義勢力であり、その物質的基礎を封建的な地代徴收の基礎に持つて居たが故に、版籍奉還—廢藩置縣—秩祿公債の發行—地租改正の一聯の事實を以て封建制の解體となす論者とは對立して、それは封建的支配階級の改良的なブルジョア化の一面のみを示すものであると論じ、然しそれの生産=搾取關係に於ては依然として封建的諸關係の存在を認めるのであるが、決してそれは「封建制の再組織」ではないと云ふ。(一四頁)地租改正の評價に於てもそれは單に「封建制の

再組織」ではなくして、眞に不可避的な上からの絶對主義的改良的ブルジョア的革命開始の端緒たるものであつた。（一四頁）かくの如く、絶對主義の要請はあくまでブルジョア的諸條件の急速なる育成とブルジョア的方向への改良的發展を含む。―然も封建的搾取關係の土壤の上に、資本の所謂「原始的蓄積」の強力なる槓桿として―。

以上、明治維新に於て一方創出せられた土地所有關係＝農業關係の封建的性質を十分評價認識することは極めて重要であると共に、他方ブルジョア市場關係に應ずるための商品生産の發達、ブルジョア的諸關係に應ずるための近代的資本關係並にその諸條件創出のための一應の進歩性を認識する事は極めて重要である。「維新革命に於ては、一方に於て土地所有關係の封建的性質を十分の把握する事が必要であると共に、一方この問題（ブルジョア的生産關係の爲めの、ブルジョア的諸條件の創出―引用者）の理解は又重要である。何故ならこの中心的課題の把握なくしては、日本資本主義に於ける國内市場形式の過程も、その急速な資本主義發展の過程も、共に全く理解し得るものでないからである。」（二八―二九頁）

右の諸點は明治維新の評價に於ける中心的課題の一つであつて、これとの關聯に於て明治維新により創出された地主的土地所有―小作制度の特質を知る事が出來やう。以下此點に關する著者の見解の主要點を見やう。

過去に於ける明治維新に於ける國内諸事情の段階に關する研究は工業部面に於ては所謂「マニュ論爭」を展開せしめ、他方維新革命の革命的勢力としての「地主」の評價に關し「新地主論々爭」が展開せられた。それは幕末土地關係の性格規定、維新革命以後に於ける小作關係發展とに關聯して重要なる問題であつた。論爭は幕末の「新地主」の中に資本家的なものゝ萠芽を見出すとなす土屋・小野氏の見解に端を發し、服部氏はそれを否定し、むしろそれを封建的な諸關係との關聯に於て把握せんとし相對立のまゝ論爭に入つた。舊著「日本農業論」は論爭の末期に登場し、土屋説を否定し、又服部説に對しても若干の批判を加へんとするものであつた。先づ著者は地主の性格を地主階級創出の史的過程の特質の中に究明する。德川封建體制内に於て發生しつゝあつた「私的地主」を三分し、（一）德川以前よりの殘存鄕士、（二）土着家臣團として創出せられた鄕士、（三）作德米收得を目的とする寄生的高利貸「高持地主」となし。此等の中特に（三）高持地主の性格並に新地主階級への移行過程を分析する。此等は明治維新の革命を通じ新しく「地主」の性格に附與されて來た。維新後の小作關係は封建的關係そのまゝの繼承ではあつたが、然しその搾取のための條件は變化し、それはブルジョア的性質の規定を受けざるを得なかつた。然し、それは決して在來の現物小作料（封建貢租プラス地主作德米）を廢止したことを意味せず、又封建的本質を直ちに消失したことを意味しない。この限りでは依然封建的地代範疇内での相對的條件の變化にすぎなかつたが、地主の封建的小作料確保のための條件は多少との變化をうけ、所謂「經濟外的强制」の内容にも變化を來たしたものであつた。かくて我國小作料の規定を一純然たる物納地代の段階よりは寧ろ物納地代の最後の段階、否物納地代と金納地代の條件が、更に部分的には「分割地」的過小農の條件すらが同時的に現はれてゐる段階とも云へる」（七〇頁）我國の土地所有は範疇的には未だ封建的範疇に屬して居り、然もブルジョア的性質を多分に附與されたものと考へられてゐる。「勞農派」の人々の誤謬は「一般的半封建的土地所有の下にあつて、極めて畸形的特殊的に、極めてノロノロに發展しつゝある所の、矛盾のモメントを反映し、それを具體的辯證法的に、矛盾のモメントの發展として把握せずして、日本農業に於ける一般關係に迄普遍公式化し、一般的半封建性を解消する」（二二二頁）にあると指摘し、他方「講座派」山田氏等の誤謬が「典型的半封建的生産關係を抽出分析し、日本農業に於ける一般的特徴づけを行へる」（二二一頁）ことに存したことを指摘して居る。

以上重要と思はれる二二の點を紹介するに留めたが、明治維新の評價に於て、我國土地制度―小作制度の性格規定に於て、極めて特徴的教訓的な見解を展開されてゐる。右は云はゞ日本農業に於ける基礎關係に關するものであつて、更に問題は第二の重點に向けられる。

註一、戸田慎太郎氏著「天皇制の經濟的基礎分析」を參照。

三

本書の研究重點の第二は第一の基礎的關係の上に發展する所のブルジョア的諸要素の追究である。「問題は更に日本資本主義發展の國内市場に於ける具體的な農業部面の發展過程、そのものの分析がなされなければならない。その場合に於て、該過程の重要内容を構成するものゝ一が、家内的手工業＝副業の＝資本主義的工場經營によつて漸次克服されて行く過程にある事は確であるが、・・・・然も他の一は、基本的半封建的土地所有關係の上に、然も發展する所の商業的農業、換言すれば市場目當ての、賣る爲めの農業經營の發展でなければならない。」（二六五―六頁）内容は、a.地主的生産力の發展並に流通部面の合理化（上篇第二章第四節、第五節）、b.半封建的基礎的關係の上に發展する所の商業的農業」（下篇第一節―第七節）。

aの問題、「封建的土地所有を根本的に解決せず、むしろ自らを封建的土地所有の全國的規模に於ける領有と地租確保の上に、ブルジョア的關係を急速に育成しなければならなかつた」（九九頁）明治政府は舊來の土地關係を變へる事無く上からの生産力發展を企圖した。それは資本主義の發達と共にブルジョア的市場關係に我國農業がまきこまれてゆく過程に於て、土

地問題を徹底的に解決せずして、然も農業をブルジョア的市場關係に適應せしめねばならぬ場合に取られるブルジョア的積極的一面であつた。零細的自作と寄生地主的土地所有關係の下に於て緩慢な長い苦惱に充ちた改良的な上からの地主的な道であつた。

b.商業的農業の問題。農業への資本の侵入は一種獨特の過程であり、農業は一擧に商品生産の性質を獲得するのではなく、その獲得の仕方は極めて多種多樣である。農業に於ける資本主義の成長は何よりも先づ自然的農業より商業的農業への推移として、或はそれは一つの生産物から他の生産物への推移として現れて來る事は理論の敎ふるところである。（註一）然もその過程が如何程複雜であれ、又その條件が如何程特殊的であれ、資本主義の一般法則はあらゆる國に於て貫徹して行く。講座派理論は農業問題の研究に於て一應の成果を擧げつゝも、專ら日本農業の特殊性としての土地問題の究明に集中し、その特殊性を重視する結果、日本の特殊性に歪曲され制約されつゝも農業に於て資本主義發展の一般法則が貫徹し、商業的農業が發生しつゝある事實の輕視或は否定に陷入る傾向を有してゐた。これらに對する批判は前述せる如く終戰後に於て活潑に展開せられつゝあるが、既に昭和十一年版舊著に於て早くも此等の問題を具體的資料により究明しつゝ批判を展開した點は卓見と云はねばならぬと思ふ。

我國に於て如何にして自然的農業が商業的農業へと展開して行つたであらうか。德川封建制下に於て米納年貢の形態が農業生産の分化發達を阻止し、農業生産の發達を停滯せしめ、生産者自身による商品流通の發達を妨げてゐた。然るに漸次その根本に於て一つの矛盾を內含してゐた。本田畑以外の年貢は本田畑に比して輕租であつたばかりでなく、漸次永納への傾向をふくみつゝあつた。（一五三頁）かくて農民自身による農産物の商品化はまず本田畑以外に於て、特に水田に比し畑地に於て有利性を示しつゝあつた。その典型的代表の一つを養蠶業に見出せた。それは米そのものゝ商品化の過程は領主及德米收得者に依るものであつたのに對比して居た。かくの如く若干とも生産物商品化の發展を見つゝあつた我國農業は明治維新を機として一層押し進められることとなつた。維新變革とそれに次ぐ地租の金納化の過程は急速に商品生産化を强行せしめたのであつた。（一六〇頁）かゝる場合地代關係より多少とも水田に比し有利な狀態に置かれてゐた畑作部面に於て、直接生産者による農産物商品化が促進せられた。即ち畑作部面に於ては水田に比し地價決定額が低廉で地租の負擔が輕く、小作關係に於て有利であり、地代の持つ制約を比較的少なからしめる可能性が存したからであつた。（一六〇頁）右の關係は逆に云へば水田に比し畑所有に於ては地主所得が相對的に僅少であり、それ故より多く自耕の傾向を示してゐた。（一六三頁）これは一方新な零細的自作の擴大を不斷に見る結果となつた。彼等の利害は專ら貨幣量如何により、農作物種類や市場價格如何に極めて敏感に反應するを不可避とし、直接生産者をして急速に商品生産者たらしめ、とゝに零細農に於ける事業的意義を持つ所の、自家用穀物資料の栽培を放棄してまで、商品的農作の轉換に進展するに至つたのであつた。（一六九頁）此等の商品生産化は具體的には種々の栽培作物代作關係として現はれ、特に稻作（米）及び桑作（養蠶）の二部門への分化集中過程として見ることが出來た。（一七〇頁）更に寄生地主的零細的土地所有の諸制約を受けつゝも商品生産として、漸次資本主義的市場に卷き込まれ、中には小數の富農的經營をも成立せしめるに至つた果樹栽培、蔬菜栽培、製茶等を見るのである。（第五節）此處で著者は次の如く注意を與へてゐる。「勿論こうした部分的發展を日本農業一般のブルジョア化と考へることは間違いであり、こうした特殊的富農經營が極めて部分的で、その規模の小さい事こそ、逆に我が農業關係の絕對主義的寄生地主的土地所有の制約を示すものでなければならない。」（二一〇頁）―勞農派への一批判である。「が然し同時に我が農業關係を何等變化せざる封建色一色で塗りつぶして考える事も間違いであつて、こうした凡ゆる封建的制約の少い地點に對して資本主義は容赦なく侵入し、これを從屬せしめて行く事に注意すべきであろう。」（二一〇頁）講座派への一批判である。

絕對主義と寄生地主的土地所有制下の日本農業に於ける商業的農業の發展＝直接生産者による農産物の商品化は基本的には自作農に於て表はれ、それが特に畑作に於て著しいこと、而もそれはブルジョア的關係の進展と共に小作をもとへつゝ進展して來た。商業的農業の發展は地代（小作料）形態をも漸次發展せしめつゝあつた。（第六節）商業的農業の發展を見る場合地方別檢討―水田地帶、畑地帶、都市との關係―を輕視してはならない。（第七節）

以上我國に於ける商業的農業の發展の事實の認識とその發展傾向のごく概要を紹介したのであるが、即ち幾多の封建的要素によりその發展を妨げられ歪められつゝも、ブルジョア的性質はその制約の少い線にそうて―基本的には地代關係―或はブルジョア的關係の緊密な地帶に於て發展しつゝある商業的農業の中に明瞭に見取られるのであつた。然し乍ら、「勿論、商業的農業への發展は必ずしも農業に於ける資本主義的經營の發展を意味するものではない。後者の成立が支配的なる爲には、云ふ迄もなく土地所有＝地代搾取關係の支配的ブルジョア的解決を必要とする。・・・・・それにも不關、日本に於ける商業的農業への發展を、「窮迫賣却」と云ふ說明によつて葬り去る事は一面的であり、誤謬でなければならない。」（二六六頁）右の著者の結論は極めて敎訓的であつて、次の研究はこゝより出發せしめられてゆくであろう。我國の半封建的な基礎關係の上に

於ても、資本主義的發展に對する制約は極めて大であれ、資本主義の一般的法則は貫徹し、殘き封建的遺物を漸次破壞し、農業をも資本が把握し、資本が自己に適應した型態に農業を變形しつゝあると云ふ事實の一般的方向はこゝに明白に、而も具體的に究明せられたのである。が、それと農業に於ける資本主義的經營の發展との關聯を如何に考へ、我國農業に於て如何に把握するかに未だ多くの問題點が殘されてゐる。著者は兩者を一應區別し、我國農業に於ける問題點を次の如く指摘される。

「問題は我農業への資本主義的侵入が不可能な事にあるのではなく、それが餘りにもカンマンであり、貧弱な所にこそ矛盾のより大なる發展が現はれていると云はねばならないのである。」（二六七頁）こゝより氏は結論として實踐的課題を强調する。

井上氏の批判の一要點が右に關するものであつて多くの指摘點を含むものであるが、未だ解決せられざる多くの問題を殘して居ると云へやう。

舊著「日本農業論」が發刊せらるゝや木村莊之助氏等により批判が加へられるに至つたが、未だ一般的には本書の持つ方法論的見地や具體的な諸問題への究明の意義は充分認識せられず、其上一種の信仰にまで結晶化されてゐた當時の講座派的見解に對して未だ全面的に充分なる批判たり得なかつた點や、客觀的狀態の不溫等より、充分なる理論的展開を見ずして終つた。然し乍ら、本書の持つ意義を既に高く評價する論者も現れてゐた。云はゞ「折衷派」「中間派」と云ふ誠に有難くない名稱の下に不當の評價を受けて居たのではなかろうか。

註）、レーニン「ロシヤに於ける資本主義の發達」神山茂夫氏著「日本農業に於ける資本主義の發達」

（二二・一二・一三）

前號（昭和二十二年十・十一・十二月號）目次

慶應義塾九十周年記念論文集第二輯

企業の再建と經營分析　三邊金藏
企業批判の基準　小高泰雄
國民優生法改造私案　寺尾琢磨
米國經濟の一側面―その地域的構造　小島榮次
無額面株　町田義一郎
卸商業論　鈴木保良
累積過程の變則　千種義人
戰後世界植民地問題の所在點　山本登

編輯後記

コンコードの詩人ソローは、その著「ウオルデン――森の生活――」の中で、彼が雜草を拔いてゐた時に一羽の雀が肩に止まつたが、それは彼の着けた如何なる肩章よりも優れたものだと思つたことであつたと、述懷してゐる。偶々ソローの著者を繰つてゐると、右の箇所に朱線が引いてあるのを見て、二十餘年前まだ私が金ボタンの制服を着てゐた頃、初めてこの本に接した時に受けた感慨と變らぬものを、再び味ふことが出來たような氣がした。すべての人々がソローの右のやうな氣持を抱くやうになつたならば、世の中はどう變ることであらうか。ソローと彼の時代、そして現在の世相などと、考へさせられるところが極めて多い。

× × ×

用紙割當量の不足と發行日の遲延との二つの障碍を切り拔けるため、年頭早々二ケ月合併號を編輯するの止むなきに至つた。改卷直ちに泣き言を並べるのは甚だ不本意であるが、どうにも仕樣がないといふところである。その代り――といふと一寸をかしくきこえるが――この合併號の內容は、從來の本誌と稍々行き方を異にしてゐることに、年來の讀者はお氣付きかと思ふ。幸田名譽教授の解題ものと羽原講師の研究とは、固いものばかりを集錄してゐたいままでの本誌にとつて、違つた持ち味のものである。

× × ×

昨年下半期に、當學會は次の如き研究發表會を塾內で開いた。ここに報告者、題目などを報告する。

山本　登氏「戰後の世界植民地問題」（七月十七日）
小池　基之氏「戰後における農業理論の展開」（十月二日）
山中浄三郎氏「戰後のソ連農業の動向」（十月廿三日）
鈴木　保良氏「配給の機能」（十一月十三日）
金丸　平八氏「明治初期農政史の一研究」（十一月廿七日）
寺尾　琢磨市「人口問題における陶汰と逆陶汰」（十二月十一日）

昭和二十三年一月二十五日印刷　第四十一卷
昭和二十三年二月一日發行　第一・二號

本號定價　金四拾五圓
送料　二圓四十錢

禁轉載

編輯兼發行者　東京都港區芝三田慶大經濟學部內　高村象平
印刷者　東京都港區芝三田豐岡町八　川口芳太郎
印刷所　東京都港區芝三田豐岡町八　圖書印刷株式會社

豫約購讀料　一年分　金三百五十圓（送料共）
半ケ年　金百七十五圓（〃）
◇豫約購讀料は發賣所宛お拂込み下さい
◇誌代變更の場合は精算決濟致します
◇編輯に關する用件は發行所へ
◇營業に關する用件、購讀申込は發賣所へ願ひます。

發行所　東京都港區芝三田二丁目慶應義塾大學經濟學部研究室內　慶應義塾經濟學會
發賣所　東京都港區芝三田二ノ一　慶應出版社
日本出版協會員B一一〇一六
日本出版協會員A一一〇一九

配給元　東京都千代田區神田錦町三ノ九　日本出版配給株式會社